

聖書：士師記 6：1～40（11～24）

説教題：勇士よ

日時：2014年3月9日

6章の1節：「イスラエル人はまた、主の目の前に悪を行なった。」で今日の章も始まります。先の士師デボラとバラクによって、イスラエルは40年間の平和を与えられましたが、再び彼らは主を捨て、主の怒りを招いたのです。今回イスラエルの災いとなったのはミデヤン人でした。彼らは収穫の時を見計らってやって来て、農作物を略奪して行きます。こんなケースを考えて見て頂ければ良いかと思えます。皆さんが畑を持っていて、春に種を蒔き、夏の間、日でりの下で一生懸命世話をし、育てます。そうして秋が来て、いよいよ収穫できるという時、隣の人がやって来て力づくで実を全部取って行く。昔ですから警察もなく、どこにも訴えることができません。これが次の年も、その次の年も繰り返されたらどうでしょう？確かに6節にあるように、非常に弱くなってしまおうでしょう。ミデヤン人は5節にありますように、いなごの大群のように押し寄せてきます。彼らとそのらくだは数え切れないほどでした。イスラエル人はこのため、ミデヤン人を避けて、山々の洞窟やほら穴、要害に身を避けざるを得ません。これは彼らが刈り取った報いです。主は8節からのところで預言者を遣わし、そのことを示しておられます。主はイスラエルに非常に良くして下さったのに、「あなたがたはわたしの声に聞き従わなかった」と。彼らはまずこのことばをしっかりと受け止めなければならないのです。

さて、そんな中、主はなおイスラエルをあわれみ、5番目の士師ギデオンを与えて下さいます。ギデオンと言えば、学校やホテルなどで聖書を配布している「ギデオン協会」のことを私たちは思い浮かべることでしょう。その名が取られているギデオンは、さぞかし偉大な器だったのだらうと私たちは思います。しかし今日の箇所を見て分かりますように、彼はもともと勇敢な人ではありませんでした。11節にギデオンは「酒ぶねの中で小麦を打っていた」とあります。麦を打つなら、広い土地の方が良いはずなのに、岩をくりぬいた酒ぶねの中で小麦を打っていたのはなぜでしょうか。それはミデヤン人を恐れていたからに他なりません。彼はこのように元来、臆病で、小さな世界でこっそり生きているような人間でした。そんな彼を主はご自身の働きへ召すのです。先ほどお読みした箇所はモーセの召命の記事とよく似ています。モーセもあの時、エジプトから遠く離れた地で、その身を隠すように逃亡生活をしていました。ここでも酒ぶねの中に隠れているギデオンに主は現われ、「勇士よ！」と語られます。そして14節で言われます。「あなたのその力で行き、イスラエルをミデヤン人の手から救え。わたしがあなたを遣わすのではないかと。ギデオンは尻込みします。15節：「ああ、主よ。私にどのようにしてイスラエルを救うことができましょう。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。」神はいつもこのような人をご自身の働きに召されます。自分はできる人間であり、当然用いられるだろうと自負している人を神は召されません。そういう人は自分の力に頼り、主に栄光を帰さないのです。主は用いないのです。むしろ主は自分が召されるとは思ってもみない人を召されます。モーセも、イザヤも、エレミヤも、新約のペテロもパウロもそうでした。そういう者に対する主の保証の言葉はいつも「わたしがあなたとともにいる」というものです。12節の「勇士よ」という呼びかけの後にも「主があ

なたと一緒におられる」とありました。16節でも「わたしはあなたといっしょにいる。」と主は語られました。ギデオンはこれだけでは確信を持たず、しるしを見せてくださいと頼みます。モーセもそうでした。そんな彼に主はしるしを下さいました。ギデオンが供えた食べ物を、主は彼が見ている前で一気に焼き尽くしてしまわれました。ギデオンはこうして恐れをもって主からの召命を受けとめます。と同時に、大いなる平安も得ました。人は主を本当に知る時、「恐れ」と「平安」の両方を得ます。ギデオンはそこに祭壇を築き、その名をアドナイ・シャロム、すなわち「主は平安」と名付けたのでした。

さて、主の召命を頂いたギデオンに課せられた最初の仕事は、まず自分の家から偶像を取り除くことです。25節以降を見ると、イスラエル人の間にいかにカナンの宗教が深く入り込んでいたかが分かります。ギデオンの父ヨアシュもバアルの祭壇を持っていました。また人々の反応から分かりますように、町の人々もこの風習に染まっていました。果たしてこれらの偶像を取り除くようにという主の命令にギデオンはいつ従ったのでしょうか。それは27節にあるように「夜」でした。ここに再びギデオンの性格が現われています。彼は父の家の者や町の人々を恐れました。皆がバアル礼拝に染まっているのに、自分が白昼公然とこれを壊したら、どうなることでしょうか。恐ろしいことです！とても考えられません！そこで彼はしもべたちを連れて、人々が寝静まった夜にこれを行なったのです。

次の日は予想通り、町中が大騒ぎになります。誰がこういうことをしたのか！と人々は問い、結局それはギデオンだと知られてしまいます。そこで彼を引っ張り出して殺せ！と人々は要求します。絶体絶命のピンチです。しかしそこに奇しい主の導きを与えられます。31節：「すると、ヨアシュは自分に向かって立っているすべての者に言った。『あなたがたは、バアルのために争っているのか。それとも、彼を救おうとするのか。バアルのために争う者は、朝までに殺されてしまう。もしバアルが神であるなら、自分の祭壇が取り壊されたのだから、自分で争えば良いのだ。』」ギデオンの父ヨアシュは、息子の勇敢な行動によって目覚めさせられたのか、ここで大胆な弁護をしています。もしバアルが本当の神なら自分で争えば良い、と。ここには自ら何もできないバアルは、石や木でできた偽りの神に過ぎないという主張があります。この結果、人々の攻撃は治まります。まさかの展開です。奇跡的な主のお導きです。これはギデオンにとって貴重な学びの時だったに違いありません。共にいて下さると約束して下さった主は従うしもべを見捨てず、助けて下さる。だから私は自分の小さな考えで難しいと判断して主に従うのをやめるのではなく、主の大いなる奇しい御手に任せて従っていけば良いのだ！そういうレッスンを彼はここで受けたのです。

さてミデヤン人との戦いに備える場面が、今日の章最後の33節からの部分に記されています。ギデオンが戦いの召集をかけると同族のアビエゼル人たちが集まってきます。先にはバアル礼拝に染まり、ギデオンを殺せ！とまで言った同じ分団の者たちも、今やギデオンと志を一つにしていました。さらにマナセ、アシェル、ゼブルン、ナフタリ族からも人々が集まって来ます。一人が主に従う時、主はその人の服従をこのように大きく用いて下さるのです。そんな彼についてのもう一つのエピソードが36節から記されます。彼はここでもう一つのしるしを求めています。刈り取った羊の毛を打ち場に置いておき、翌朝、地面は乾いているのに、羊の毛にだけ露が降りているようにして下さいというものです。そしてそれがかなえられると、今

度はその反対を行なって下さいと彼は求めます。お分かりのように1回目より2回目の方がより難しいと言えます。羊の毛は水分を吸収しやすいため、地面は乾いても羊の毛は夜露に濡れた状態にあるということがあります。しかし地面が夜露で濡れているのに、一晩放置した羊の毛だけが全く乾いているということは考えられません。彼はそのことをもって、あなたがこれからの戦いに共にいてくださることのしるしとして下さいと願った。

果たして私たちはこのギデオンの態度をどう見るべきでしょうか。彼はすでに主が共にいて下さるという約束を頂いていました。ですから重ねてこのようなしるしを求めることは不要であり、これはギデオンの弱さから出たものであることは確かでしょう。しかし私たちはあまり彼を見下げないようにしなければなりません。彼は主に従ってここまでの戦いの準備をしました。しかし圧倒的な力を持ってやってくるミデヤン人を前にして、極限の緊張状態とプレッシャーの下にあったとしてもおかしくありません。ある時は確信に立ちつつも、次の瞬間には言い知れぬ恐れに駆り立てられるということがあっても、それは不思議なことではないでしょう。

しかし私たちにとっての驚きは主がこのギデオンの求めに2回ともその通りに答えて下さったことです。果たしてこういう祈りはして良いのでしょうか。私たちも彼にならって、このように主の御心を確かめることは許されることなのでしょうか。もちろんそれで良いとしたら大変なことになるであろうことは、すぐに想像が付きまします。私は昔、土砂降りの雨の中、学校から歩いて帰るのがイヤになって主に祈りました。「神様。もしあなたが私を顧みて下さる神なら、私が次に、雨が弱くなれ、と祈った時にそのようにして下さい。それによってあなたとともにいてくださる神であることを示して下さい。」結果はどうだったのでしょうか。何も変わりませんでした。ある人は自分のこれからの進路について自分が心に思っている道を選ぶべきかどうか迷いながら道を歩き、こう祈ったそうです。「神様。もし次に横断歩道を渡る時に、立ち止まることなく進むことができたなら、今、願っている道を進みなさい、というあなたのしるしとして下さい。しかし御心でないなら、横断歩道を渡る時に信号を赤にして示して下さい。」いかにもそれらしい祈りです。しかしこのような方法で神の御心を推し量ることができるという聖書的根拠はどこにもありません。

ではなぜ主はここでギデオンの願いに答えて下さったのでしょうか。考え得る答えはただ一つ、主がご自身をへりくだらせて下さったからです。主はここでギデオンの願いを拒否されても全く正しくあられます。その求めは正しくない、私はすでに語ったのではないかと叱責しても良い。しかし私たちにとっても慰めとなることは、だからと言って神は弱い者を切り捨てられないということです。主は私たちを慮って、時にはご自身が定めた通常のレベルよりもさらに低いレベルにまで降りて来て下さる。もちろんだからと言って私たちはこれを基準にして勝手なルールを作り出すべきではありません。主がこうして下さるかどうかは主が決めることです。私たちは示されている原則に従って歩むべきです。しかし主は時に、私たちの弱さにこのようにご自身を合わせてくださるのです。時にはこのようにしてでも私たちを支え、私たちが立てるようにして下さい。私たちはこのような主の姿を見て、ひれ伏し、あがめるべきはないのでしょうか。私たちはこのような主の愛と忍耐によって今日も立たせていただいている者たちです。ギデオンはこうして主に支えられて、いよいよ次章で見る戦いへ向かって行くのです。

以上、士師記の第 6 章。12 節で「勇士よ」と呼びかけられたギデオンでしたが、今日のエピソードはいずれも彼の弱さ、小心ぶりを表していました。主から召命を受けた時、「ああ私はできません」と言い、バアルの祭壇をこわせと言われて夜こっそりで行ない、ミデヤン人と戦う段になってさらに 2 回もしるしを求めている。しかしそのようなギデオンも次の 7 章ではまさに勇士としての姿を見せます。そこに至るまでにはどんなプロセスがあったのかというのが今日の箇所の意味ではないでしょうか。彼は最初から強い人間ではなかったのです。幾多の弱い点があったのです。しかし彼は主に頼ることを学んで行きました。主が共にいて下さるとはどういうことかを学びました。そのプロセスを経て、彼は本当の勇士となり得た。そんな彼へと導くべく、主は先取りして「勇士よ！」と語りかけておられた。主はこの箇所を通して私たちにも同じように語りかけておられるのではないのでしょうか。私たちも自分を見れば弱い者です。しかしその現実ばかりでなく、その私に主が共にいて下さるというもう一つの現実があることを正しく見、また信じているでしょうか。その聖なる神と一緒にいて下さるといふより大きな現実をしっかり仰ぎ見て歩む時、その人は「勇士」であり得る。主の使いはギデオンに言いました。「勇士よ。主があなたといつしょにおられる。」主は私たちにも語っておられます。「勇士よ。主があなたといつしょにおられる。」私たちはこの言葉を頂いて、今週遣わされるところで、主がともにいてくださることに力と慰めを見出し、主に強くされて、与えられている課題・使命に向かう歩みをささげたいと思います。